

日本文化の伝道師 ～和裁を通じて伝統文化を発信する企業～

7-14 石田和裁

リピーターが絶えない会社

石田和裁は、着物、羽織、袴などの縫製を行う企業である。呉服専門店や加工会社からの依頼で縫製を行う場合と、一般顧客に対して、縫製だけでなく寸法直しや染め替えなどの加工サービスを行う場合がある。

同社の代表である石田氏は「最近百貨店などの販売店の売上が減少してきています。その代わりに一般顧客が直接申し込みを下さるケースが増えていきます。例えば家にしまいこんである着物を改めて着てみようというような場合です。今の体型に合わせた寸法直しや、流行に合わせた染め替えなどの加工全般を引き受けています。」と最近の傾向を語る。高い技能に基づいて行われる加工を求めてリピーターが絶えないそうである。

石田氏はまた、経営方針について「会社として重視するのは『和裁を通して社会に役立つ人材を育てること』『いい縫製を世の中に送り出すこと』です。社員には、自分の生きる意味、その中での仕事の位置付けを毎日問い続けています。」と熱く語ってくれた。この問いかけを始めてから、目の前の技能を高めることだけでなく、高い理念や目的意識を持って仕事を行う雰囲気生まれた。このことで全国和装技術コンクールでの成績が向上しているという。同コンクールでは過去8年間で4度の優勝を誇る。

技能検定は9人の正社員の100%が合格しており、技能グランプリでは2名が優勝している

黒子として本物の品質を追求

石田氏に、技能者とは何かと問いかけた。「和装業界では、和裁技能士は黒子であり、日の当たらない存在なんです。例えばデザイナーさんや彫刻家さんなどであれば自分の名前の製品が世に出ていきます。しかし和裁業界では縫製会社またはその社員の名前が直接製品に書かれることはありません。しかし、顧客からは、ブランド名がない分、製品そのものに対して厳しく評価を頂きます。結果としてよい評価を得られたときは、本当によいものを世に送り出したのだという実感があるんです。」と石田氏は語ってくれた。ブランド名や個人としての知名度があれば、顧客の評価はその名声に流される。しかし、そうでないからこそより本物を作ることで勝負していくという同社の強い信念が透けて見える。

海外在住の日本人が重宝する着物を手がける

同社は、某専門店が海外に在住している日本人向けに販売する着物や海外在住日本人の着物の縫製を数多く請け負っている。米国のニューヨークやシアトル、フランスやイタリア、カナダなど世界各国の日本人に縫製を提供している。石田氏は、「海外在住の日本人はパーティーやコンサートに出かけるときに着物を着ることで注目度が向上したり、ステータスが上がるということで、予想以上にニーズが高いですね。海外向けの製品は、高い技能が要請されますが、技能検定や技能グランプリ優勝などの実績が信頼感や受注に結びついています。」と語る。

同社は高い技能によって海外に住む日本人が日本文化を発信するのを黒子として支えているのである。

私塾(3年間)で基本を徹底指導

石田氏は、「うちに入社したら、朝から晩まで着物一色。青春をささげる思いで一生懸命です。だから指導にも熱が入ります。入社すると、指導員から徹底的に基礎を教えられます。最初の1ヶ月は長い布(きれ)をひたすら縫う「運針(うんしん)」を続けます。最初は一枚の木綿から始め、次に絹になります。木綿は抵抗があって縫いやすいが絹は滑りやすく縫いにくいからです。

その次の1ヶ月は「くけ」という布と布を針を表に出さずに縫う作業を続けます。それがある程度できるようになると着物の裏地の作業を現場で担うようになります。裏地の次は、長襦袢(ながじゅばん)(着物の下着のようなもの)へと進んでいきます。2年目で単衣(ひとえ)の着物、3年目で袷(あわせ)の着物となります。4年目からは留袖、振袖に入り、同時にコンテストを視野に入れていきます。このレベルになると『早くきれいに』を重視し始めますね。」と明快な指導方針を語る。

こうして5年経つころにはプロ中のプロとして独立できるまでの力を身に付ける。石田氏は「日本文化、伝統文化をもっともっと発信していきたい。」と更なる飛躍を目指している。

石田和裁

- 業種: 和装製品製造業
- 住所: 神戸市中央区籠池通
- 代表者: 石田昭博
- 設立: 昭和2年
- 従業員: 21名
- 技能士: 12名

技能士へのインタビュー

石田 久美子氏 (50 歳) 1 級和裁技能士

手に職を付けるために和装業界へ

石田和裁の社員は全国和裁技術コンテストや技能グランプリで数々のタイトルを手にしてきた。今回は、技能グランプリで優勝経験のある石田久美子氏にお話を伺うことができた。

久美子氏は、「父親が厳しい人で、『女性はもし夫が亡くなったり離婚した際に自分で食べていけるようにしなければならない。』という方針だったので、手に職を付けたいと思っていました。ちょうど3歳年上の姉が和裁業界に進んでいたのも、私も興味を持ち高校卒業後和裁業界に入りました。最初は何も知らずに入ってきたので、『着物って裏がこんなに継ぎはぎなんだ。』と思ったことを思い出します。」と語ってくれた。当たり前であるが、技能グランプリ優勝者の久美子氏でもこんな時代があったのだ。



石田久美子氏

徹底した創意工夫で一流に

石田和裁では、5年間で一流のレベルに到達し、その後は独立することもできる。久美子氏は、「一流になるまでに5年間という期間がありますが、私にとっては3年目が1つの大きな山だと思えます。3年目までは基礎を徹底的に積み上げる期間で非常に苦しかったです。『もっと上もっと上』と言われ続けたんです。ただ、3年間基礎を固めつつも一つ一つの工程に必ず自分の創意工夫を入れていったので、4年目からはいい意味で坂を転げ落ちるようにうまく進み始めました。4年目以降は全てが3年目までに築き上げてきたことの応用だったからです。」と振り返って語ってくれた。さらに「苦しい、辛い日々でしたが、『あの苦勞が今に結びついたんだな。』と振り返って思えます。」という。

さらに、「本当の技能士は、必ず自分の得意技を持っていると思うのです。得意技があるからこそ、他の誰かとは違う一流の存在になれる。一流の技能士になるためには、創意工夫を徹底し、得意技を身に付けることが欠かせません。指導者に教えられたことは確実にこなしながらも、自分の工夫をどんどん入れていくことが、一流へ

近づくと道だと思えます。」という久美子氏の発言は、ご自身の苦勞体験に裏付けされており非常に説得力がある。

指導者として生きる技能検定の実績

タイトルホルダーである久美子氏が技能士を志したきっかけは何だったのだろうか。「会社の方針であったということと、独立を考えた場合に検定資格がなければ自分の技能が証明できないと考えたからです。1級はその証明なんです。」という。

技能検定の利点について聞いた。「正直、技能検定は一流になるための通過点としか思っていません。ただし、後輩社員に対して技能検定を勧めたり、指導したりする場合に自分が合格していなければ説得力がないと思っています。」と明快に答えてくれた。また、グランプリ優勝という実績について伺うと、「教えられたことだけでなく、自分がすごく創意工夫してきたことが結果としてグランプリ優勝につながりました。自分が工夫を続けてきたからこそ、後輩を指導する際にも細部にわたって教えられます。コンテストや技能グランプリで優勝するということは、基礎はもちろんの事、職人的な勘や工夫、プラスアルファが絶対に不可欠です。後輩社員がコンテストに挑戦するための指導に自分自身が優勝に向けて創意工夫してきた経験はすごく役立っています。」と答えてくれた。

今後も後輩社員指導に邁進

今後は何を目指しますかと聞いてみた。すると、「ここ(石田和裁)にきて学んでくれた子が、『石田和裁に来て良かった』と思えるような指導をしていきたい。」と熱く語ってくれた。

後輩社員への深い愛情が見えた。久美子氏に育てられる社員がうらやましく映った。



同社に飾られる数々の賞状